<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>「書の視座」と書物研究 和刻法帖の事情を中心に</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>岩坪 充雄</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>書物・出版と社会変容</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2008-11-10</td>
</tr>
<tr>
<td>型式</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
<tr>
<td>リンク</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10086/17068">http://hdl.handle.net/10086/17068</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

|  |  |
|  |  |
岩塚 充雄

「書の視座」と書物研究

和刻法帖の事情を中心に

はじめに

最初に「毛筆思考」と「活字思考」という言葉を設定して考えてみたい。

「毛筆思考」は江戸時代の事情を指すものとし、「活字思考」は現代の事情を指すものである。このことから、「毛筆思考」という視座においては、ここに相対させた「活字思考」の視座を前提として考えに立つべきである。

現代人には、現実の人間の立場を指すことがなるために、現代人を前提とした立場を考えることに、のちに相対させた「活字思考」という環

現代人があらかじめ想定して考えることはなく、江戸時代があらかじめ想定して考えていた「毛筆思考」が筆を執って書いている。この比較の視座において、筆者を含むこの部分の読者にと、これに位置しているからに他ならないからである。

が、別に今日のような活字世界が有り得るという想定に基づいていた訳ではないからである。この比較の視座について、筆者を含むこの部分の読者にと、これに位置しているからに他ならないからである。

現実の現代人があらかじめ想定して考えることはなく、江戸時代があらかじめ想定して考えていた「毛筆思考」が筆を執って書いている。この比較の視座において、筆者を含むこの部分の読者にと、これに位置しているからに他ならないからである。
そこで、「毛筆思考」と「活字思考」という言葉を利用した考え方を提起した。さらに、「活字思考」は、現代の言葉の姿を模索し、活字の時代の特徴を捉えようとしたものである。一方、「毛筆思考」は、毛筆を用いた書道の実践を通じて、古来の文化を守り続けたものである。

現代人達の言語は、文法が正しく、文脈が明確であることは重要だ。しかし、時代を越えて伝えるためには、言葉の本来の意味が理解されることが必要である。活字の長所はそのような点にかかっており、毛筆の短所はそれを必要以上に際立たせるものである。

毛筆の特徴は、手書きの自由さ、書体の多様性、書体の表現力にある。毛筆で書いた文字は、一筆書きで書くのが普通であるが、毛筆の柔軟性を利用した筆順の自由な変化によって、新しい表現が生まれる。これにより、表現力が向上し、文法の一部としての意味が強調される。

一方、活字の長所はその印刷の効率性にある。活字は、一度印刷すれば無数にコピーすることが可能である。これにより、同一の情報を大量に発信することが可能となる。これにより、同一のメッセージを効率的に伝えることが可能となる。

毛筆の短所は、書くことでなければ表現できない、書体の表現力の制限がある。これにより、表現力を制限される。一方、活字の短所は、印刷の際にゴシックで印刷されることが多い、変化の幅が制限される。これにより、表現力が制限される。

毛筆思考と活字思考の違いは、こうした特性に基づいている。毛筆思考は、手書きの自由さを利用し、文脈を大切にする。一方、活字思考は、印刷の効率性を利用し、大量で平易な情報を発信する。
毛筆書体の資料を読んでいるからである。

江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入っている。江戸時代に出版された書物の中には、大量の和刻本の抄録が入いている。
第一として了解しやすいのは凸字版法帖である。右には森川竹窓の「千字文」冒頭部分を掲載する。法帖の目的は書の手本であり、この千字文の刊行を進めた八丈建の書を摘抄した。多到十数万字は書の体裁。書は每一字を裁せしめ、古来の書法を模倣するため刊行したという。

凸字版『草書千字文』（部分）
版木の写真だが次に図版の例を掲げる。江戸時代の大方の出版は文字を鏡文字に影り残した版木で描くというものですあった。この原理は版木版画に共通である。一般書物の事例として左に版木写真をもう一つ掲げる。

これは序文の版木で筆意影りされているが、鏡文字に版木が作られていることを確認いただきたき。これと同じ原理で、文字部分を影って、その周囲を影り残した書道手本を第二の印刷法として「左版」と呼ぶ。前掲の表中では、慶長刊本の「四体千字文」を掲げたので、その部分を図版で示すこととする。文字が白抜きになっていることを確認いただきたき。
この技法による出版物は書道手本である法帖と拓刷画と呼ばれる画本の一部になるほか、優れた筆跡を再現する努力の結果から行わざるを得ないものをである。正面摺り法帖としては長崎版と呼ばれる《草書千字文》が若干早い。而善書に富んでいるのは《原始墨本》の題字を持つ《長崎帖》だろう。ここでは正面摺り法帖の例として巻戡湖の《草書千字文》を示す。

正面摺りと左版の区別をここで掲載の図版で行うことは困難なことと思われる。区別を知る最善は物を手にして実際に物に対峙することであろう。その区別の要領は、区別を知る人にその判別を示して、目の付け所の指摘を受け自分で理解するのが近道だろう。紙面でそれがどこまで実現するのか。無理を承知で二種類の墨跡の《草書千字文》を掲げる。上は正面摺り、下段は同じ部分の左版である。
正面掲り版木の例

巻絵湖の二つの草書千字文は、おそらくお若い歳の抄写家が製作したとされているが、内部の文字は左掲りで表記されており、左掲り版木の例として知られている。版木は、原稿を掲げたものに印刷し、その後に前後にしたものに印刷することが行われた。

正掲り版木は、この複雑な作業を簡素化するために、絵柄を左掲りにした版木が用いられる。左掲り版木は、版木の製作に時間を掛けるという点で不利であるが、版木の製作が簡単であるという利点がある。
永和九年
暮春之初
會于會

歳在癸丑

正面描り『蘭亭序』巻菱湖書

永和九年
暮春之初
會于會

歳在癸丑

凸字版『蘭亭序』巻菱湖書
前掲の法帖印刷分類表の中で、凸字版、左版、正面摺りの三種類の印刷法が混在している法帖の例として「禹碑」を掲げる。本文を正面摺りに、そのままの形を左版に作成の奥付が凸字版にいうものである。

正面上摺り『禹碑』（本文部分）

凸字版『禹碑』（奥付部分）

左版『禹碑』（仮文部分）
三、字姿から見える近世日本の文字環境

当時の姿のままに現在に伝えられている書物は、当時の
の価値観のままに存在している時代の証言者の存在しない
時代、毛筆のみの筆記が残されていった時代の書物は、版
木をもたない筆で版下があった手寫の世界的積み重ねであ
る、手で書く文字である。能書が書いたものである
れは、手の字を見れば誰にでも知られることが、印刷し後世
に残そうとするならば能書の版下を依頼するという感覚
は当然のことであったろう。その書物の版下を誰かが
されるかが話題になる時代が江戸時代であった。能書である
江戸時代の識字率の高さは話題になるが、ただ文字を知
るばかりではなく、さらに字を上手く書く訓練をする事
でも当時は価値があったのである。習うには手本が必要
とならば印刷でまかなう必要がある。中国の隷隸字が
伝えられるようになったが、江戸時代初期の法書は「四体千字文」に見る
ように精錬な書で、これが実際に手習いは使われていた
とされる。隷隸の結びの結びが印刷術の一部をも
たれるようにに筆画の選択が、本場中国の法帖に匹敵するほ
どの手本を生み出しているようになっていたのである。書物
の内容もそのことながら価値の裏にも優れたものを持つ
ために、手の字は全て字姿で価値がある書物であるため
大切な。書の手本は全て字姿で価値がある書物であるため
"
いったのであり、どのような字を撮られているかは、毛筆世界の中で作られた書物に対して時間には大切な感じであるといううえで、その字姿の中には当時の人々が書き分けるというのと解する意識が込められているか予想できるからである。

図版目録の一例も掲げよう。

文はカタカナ交じりの堅い口調になっている。後半に出てくる言葉の類は行書になり仮名も含む書目では草書になって、字姿から書物を読んだ時の雰囲気も伝わる。
四、おわりに

例えば事実を直接引用した際に、毛筆書の時代では、現代と異なる毛筆という文筆道具の機能制約の中で生まれた。現代の活字やフォントにはそのような制約はなく、必要に応じて変換できる。書の姿の中にある価値観が確かに反映されている。書の視座による対面から始める必要もある。書の素材に限らず、文字であれば全て、書き手が書かなくでは始まらない。世界の中である以上、書とは何か、という意識は変わらない。

文字にしたがって人間の思索や文学、哲等に様々な創造的作業が発展し、記録され伝えられる。書の形態や書の形態が価値観や時代を理解する指標となる可能性は高い。この毛筆の用紙名から日本化が脱却する時、誰がどんな文を書いたかの意識が純粋な内容から始まる活字書物の時代が到来し、今日日本人の手はペンを握って文字を書くことを止め、指をキーボードの上で下さくなって叫くこともない。

現在の書の書き手は、書の視座を変えており、そこに近現代の差を生み出す。近現代に至るまで、書の書き手は手が作る文字という形態を追求する時、書の視座を変える必要がある。
語学部文京学院大学短期大学紀要昭和55年1-2号
（江戸の文
字環境研究）
文京学院大学
外国語学部文京学院大学
短期大学紀要昭和55年1-2号を参考

図書目録
主たる作者
名著者名

2006年2月

田赤峰の門人とされ、田赤峰は松下烏石の門人である

1716-1800

伊藤若冲(1656-1729)に正面部写技法による作品がある

ことを指す。かつて成化十八年一月七日書物・出版と

社会変容研究会の前に橋大学在野書院会場に行わ

る「素睫石冊」明和五年刊の原版を目撃している。

おそらく金紫藤の四冊の内の一冊とおぼえきかそれらは、

正面部写の見事なものであった。

鈴木俊幸編著発行『書
籍文化史』831号

(4)田赤峰の門人とされ、田赤峰は松下烏石の門人である

ところから、この師承の中での「禹碑」の上梓がなされた

も故なしとはしないだろう。松下烏石使用の「辰’

印の印影。